

「如說修行抄」講義

文永十年五月 五十二歳御作
佐渡一ノ谷に於て

(御書全集 五〇一ノ一、五〇五ノ一)
編年体御書五五四ノ一、五五八ノ一

法華經の行者にはかならず難がある

この「如説修行抄」は、日寛上人の文段にもとづいて拝読するのが、もっとも正しい読み方です。

日寛上人は、日蓮正宗の第二十六世の御法主上人です。日寛上人は、「開目抄」とか、「観心本尊抄」とか、または「立正安国論」とか、重要な御抄について、それぞれ文段を著され、こう拝読すべきだと、ことこまかに御教示くださっております。

同じく「如説修行抄」についても、厳しく、そしてまた正しく読むことができるようにとの意味で、文段を著されております。

ただし、その文段をとおしての読み方は、ここでは略しておきます。あくまでも、この御抄を中心にして、信心のうえから読んでいくいき方にしておきます。

将来は、日寛上人の文段を根本とし、基本として拝読していくべきであることを、頭に入れておい

てもらいたいと思います。

夫れ以んみれば末法流布の時・生を此の土に受け此の経を信ぜん人は如来の在世より猶多怨嫉の難甚はなはだしかるべしと見えて候なり、其の故は在世は能化のうけの主は仏なり弟子又大菩薩・阿羅漢あらかんなり、人天・四衆・八部・人非人等なりといへども調機調養じょうきじょうようして法華経を聞かしめ給ふ猶怨嫉多し

「如説修行抄」——説の如く、修行する抄、ということです。

「説の如く」とは、一義は、釈尊の説の如くということですが、根本は、末法の御本仏である日蓮大聖人の説の如くということであります。「修行する抄」とは、実践する抄、との意味です。

「夫れ以んみれば末法流布の時・生を此の土に受け此の経を信ぜん人は如来の在世より猶多怨嫉の難甚しかるべしと見えて候なり」

ここには、宗教の五箇が明らかに説かれています。宗教の五箇とは、教・機・時・国・教法流布の先後せんごをいいます。教え、機根きこん、時、国、そして、教法が流布していく姿が、宗教の五箇です。

「夫れ以んみれば」——つらつら考えてみるならば、「末法流布の時」——末法とは、釈尊在世を中心にして、滅後千年が正法、つぎの千年が像法、それから釈尊滅後二千年以降を末法というのです。

いまは末法の時です。末法とは、末法万年尽未来際です。これから永遠に末法が続くのです。その先驅が今です。

宗教の五箇にあてはめれば「末法」は、「時」をあらわしています。「流布の時」というのは「教法流布の先後」にあたります。

「生を此の土に受け」——「此の土」が「国」になります。日本国のことです。

このように、大聖人の仏法の説き方は、ひじょうに論理的です。説いている論理が完璧かんぺきなのです。

「此の経を信ぜん」の「此の経」が「教」になり、「信ぜん」が「機根」になります。

わずかこれだけの御文のなかに、宗教の五箇をぜんぶ明かしているのです。大聖人の御書のどこを拝読しましても、宗教の五箇とか、三重秘伝とか、五重の相對とか、四重興廢とかが、このように組み立てられているのです。それは、長く教学を学んでいきますと、だんだんわかってきます。

しかしながら、相伝のない日蓮宗の輩やからが御書を拝読すると、それが読めない。そこに大きい誤謬ごびやうが生じるのです。

相伝ある日蓮正宗のみが、完璧な大聖人の仏法を、正しく、深く拝読することができなのです。

「夫れ以んみれば……信ぜん人は」——末法の時代に流布をしなくてはならない時に、生をこの日本国にうけ、そしてこの経、すなわち三大秘法の南無妙法蓮華経を信ぜん人々は、「如来の在世より」

——釈尊在世より、「猶多怨嫉ゆたおんしつの難はなはだ甚しかるべしと見えて候」と、そのように法華経のなかに予言されている。このことは法華経の法師品、ならびに勸持品等々に説かれております。

「猶多怨嫉」——「猶怨嫉多し」と読みます。釈尊の時代よりも、末法において、三大秘法の南無妙法蓮華經を流布する人、それを信ずる人は、なお怨嫉が多い、やきもちを焼かれる、非難される。しかし、いくらやきもちを焼かれても、批判されても、非難されても、經文どおりだから、なにも恐れる必要はないのです。

怨嫉されることによって、自分は罪障消滅になります。相手も罰をうけて、結局、最後は罪を消します。信ずる人も、謗ずる人もともに、せんずるところは救われていくのです。これが仏法の法則です。

「其の故は在世は能化の主は仏なり弟子又大菩薩・阿羅漢なり」

「其の故は」——それでは、なぜそのような難を受けるのだろうか。ここでは、釈尊在世のこと、仏法発祥の時のことを述べられております。「在世」すなわち釈尊の時は、「能化の主は」——一切衆生を指導し、救済してゆくあるじは、「仏なり」——釈尊であり、三十二相を具備した立派な仏さまであつた。本をただせば、釈尊は王宮に生まれた貴族です。

「弟子又大菩薩・阿羅漢なり」——また釈尊の弟子は、大菩薩です。現代でいえば、東大の教授のような立派な人たちばかりです。釈尊が出現した当時は、大菩薩といえば、仏法を根底にして、その当時のインド全体を指導しきつた指導者をいったのです。

いまは「菩薩」などというと、なんらわれわれの生活に密着しない別世界のもののように思われていますが、そこにも仏法の乱れ、また一般に仏教が現実生活に対して価値をなくしてしまっている姿

があらわれています。しかし、釈尊在世はそうではなかった。

いまわれわれは地涌の菩薩の眷属けんぞくです。現実の社会に、国家に、民族に、世界に、もったも貢献こうけんし、それを指導していく力ある指導者でなくてはいけないのです。

それはさておいて、つぎに「阿羅漢」というのは、やはり、悟りをえた大学者ともいえましようか。仏法上では、小乗教の悟りをえた人々をいいます。やはり大菩薩に等しい、優秀な人たちです。

「人天・四衆・八部・人非人等なりといへども調機調養じょうきじょうようして法華経を聞かしめ給ふ猶怨嫉多しなぐさんしち」

人界の人々、天界の人々、そしてまた「四衆」——一般の僧侶、一般の尼僧、そして一般の男の人、一般の女の人、これを四衆といっています。

それから八部というのは、これは、天、竜、夜叉やしや、乾闥婆けんたつば、阿修羅あしゅら、迦楼羅かろうら、緊那羅きんなら、摩睺羅迦等まごらかで、ちょっと言葉はむずかしいですが、どんな生命の持ち主であっても、ということなのです。

それから「人非人」——これは、人生という観点からみた場合には、人間以下のものであってもとということ。地獄界、修羅界、そういうところで生活をしているもののことであります。

「調機調養して法華経を聞かしめ給ふ」というのは、釈尊が長いあいだかかって、小乗教から、権大乘教、実大乘教と、説いてきたことをいうのです。だんだん仏法を認識させ、だんだん釈尊を信奉させるようにして、最後に法華経を聞かせたのです。

また、この調機調養というのは、「四十余年未顕真実」でいう四十余年間の調機調養という意味だけではありません。過去世の過去世、そのまた過去世を説かれているのです。何百年、何千年、何万

年のあいだ、釈尊が、何回も生まれては人々を教え、だんだんと衆生の機根がととのい、頭がよくなり、法華経がわかるようになってきて、信心するようにうまくリードしてきたという意味なのです。それであっても、なお、まだ怨嫉があったというのです。仏にさせまいという魔の働きがでるものだ、批判があるものだ、ということです。この釈尊の時代の衆生のことを、本已有善ほんいりぜんの衆生ということです。すでに過去にずっと化導され、調機調養じょうきじょうようされ、「本已もとすでに善が有る」衆生をいうのです。しかしながら、末法の衆生は本未有善ほんみりぜんというのです。なにも仏道修行を積んできていない。ですから、御本尊のいわれを五年や十年聞いただけでは、末法の人々が信心するわけではないのです。それを説明もしないで、はじめから信心しなければ罰がでるぞなどというのですから、怨嫉も大きいわけです。

このように釈尊は、やわらかく長く、そしてまた包容しながら、説明しながら、何百年、何千年、何万年と説いたが、まだ怨嫉が多かったというのです。

末法は三毒強盛の人が集う

何に況んや末法今の時は教機時刻当来とうらいすといへども其の師を尋ねれば凡師たふしなり、弟子又闍諍とくじよう堅固・白法隱没・三毒強盛の悪人等なり、故に善師をば遠離し悪師には親近す、其の上真実の

法華經の如説修行の行者の師弟檀那とならんには三類の敵人決定せり、されば此の經を聴聞し始めん日より思い定むべし況滅度後の大難の三類甚しかるべしと、然るに我が弟子等の中にも兼て聴聞せしかども大小の難來る時は今始めて驚き肝をけして信心を破りぬ、兼て申さざりけるか經文を先として猶多怨嫉況滅度後・況滅度後と朝夕教へし事は是なり・予が或は所を・をわれ或は疵を蒙り・或は兩度の御勘氣を蒙りて遠國に流罪せらるるを見聞くとも今始めて驚くべきにあらざる物をや

「何に況んや末法今の時は教機時刻當來すといへども其の師を尋ねれば凡師なり」

ここからは、末法の大聖人の時代のことを述べられています。

いかにいわんや末法の今の時は、「教機時刻當來す」——「教」は三大秘法の御本尊、「機」は、南無妙法蓮華經を信じなければならぬ衆生の機根です。「時刻當來す」とは、釈尊の仏法は、すでに二千年で終わつた。いまは大聖人の仏法のひろまるべき時です。

「其の師を尋ねれば凡師なり」——「其の師」とは人本尊。これは日蓮大聖人のことであります。

「凡師なり」とは、日蓮大聖人は、漁師出身の凡夫僧のお姿です。ですからだれも信用しません。なんだ、あんな僧侶が、といつてきかないのです。釈尊の場合には、ずっときらびやかに振る舞つてきたから尊敬されたのです。

「弟子又闘諍堅固・白法隱没・三毒強盛の惡人等なり」

これは、大集經等にでてゐる文です。末法の衆生は、「闍諍堅固」——教義の面で、闍諍言訟ごんしやうともいいますが、みな喧嘩けんかばかりしてゐる。いま、日本の国のなかでも、争つてばかりゐる。また世界中が、広い意味でこの予言どおりではありませんか。

「白法隱没」——釈尊の仏法が、まったく効力を失う、ということなのです。新しい仏法でなくてはならない、という意味です。

「三毒強盛」——末法は本末ほんまつ有善うぜんの衆生ですから、「貪・瞋・癡」の三毒強盛の悪人ばかりです。

「貪」は食欲です。人を殺しても、押しのけても、食つていこう、生きていこうとする。「瞋」は、すぐに怒ることです。おっとりして、福運豊かに、悠々と人生を生きていくことができないのです。電車に乗っても、ちょっとしたことですぐ腹をたてる、怒りだす。「癡」はおろか。自分では、ひじょうに頭がよいつもりでいて、あすの生命いのちすらもわからない。人生の根本のいき方を知らない。おろかなのです。そのように、末法の衆生はみんな悪人なのです。

「故に善師をば遠離おんりし悪師には親近しんこんす」と述べられているのです。

「善師」とは日蓮大聖人、「悪師」とは邪宗の僧侶などのことです。

「其の上眞実の法華經の如説修行の行者の師弟檀那とならんには三類の敵人決定けつじやうせり」

「眞実の法華經」とは法本尊です。三大秘法の御本尊を根本として、本門の題目を唱えきつていくという如説修行の行者の「師弟檀那とならんには」——現代というならば、日蓮正宗創価学会員として、広宣流布という使命に向かつて、題目をあげながら進んでいく人は、「三類の敵人決定せり」——

かならず難があるのだ。批判をこうむるのだ。そんなことで驚いてはいけないとおおせなのです。

「されば此の經を聴聞し始めん日より思い定むべし」

三大秘法の仏法を実践し始めん日より、決意をなささい。心に決めてかかりなささい。

「況滅度後の大難の三類甚しかるべしと」

釈尊の予言どおり「況滅度後の大難」——これは末法をさしている予言です。その大難がかならずあるということを、覚悟しておきなさい、とのおおせです。

この大難に、事実遭あわれたのは、日蓮大聖人です。師匠に難があれば、その門下の一分であるわれわれにもやはり難があるのは当然です。

「然るに我が弟子等の中にも兼かねて聴聞せしかども大小の難来きたる時は今始めて驚き肝きんをけして信心を破りぬ」

この「如説修行抄」は、日蓮大聖人が佐渡の国へ流されたときの御書です。まえまえから、この三大秘法の南無妙法蓮華經を弘める人には大難があるときいていた弟子檀那も、日蓮大聖人が佐渡へ流され、また自分たちにも大小の難がふりかかってくると、はじめてビックリして退転してしまった。それに対する戒めいましが、この御書なのです。

「兼て申さざりけるか」

まえもってよく教えておいたではないか、ということです。

「經文を先さきとして」——あくまでも經文を示して教えられたのです。われわれもまた、御書どおりに

進めばよいのです。

「猶多怨嫉おんしつぎやうめつとこ況滅度後・況滅度後と朝夕教へし事は是なり」

仏になるためには、末法においては、世の中が悪いのだから、難はかならずあるのだ。だが、難があったからといって、絶対に退転をしてはならないということは、朝夕教えておいたではないか。

「予が或は所を・をわれ或は疵きずを蒙りこうむ」

「所を・をわれ」とは、松葉ヶ谷まつはがやの法難であり、「疵を蒙り」とは、小松原の法難のとき東条景信の迫害をうけ、刀で眉間みけんにきずをうけたことをいいます。

「或は両度の御勘氣を蒙りて遠国おんごくに流罪せらるるを」

これは島流しです。「御勘氣を蒙り」とは幕府のとがめをうけたということです。島流しにも近流こんる、中流ちゅうる、遠流おんるとありますが、日蓮大聖人は、いちばん遠い所へ流された。死刑に匹敵ひつてきします。両度とは、二回ということです。弘長元年五月十二日の伊豆の伊東と、文永八年十月の佐渡の二回です。

「見聞くとも今始めて驚くべきにあらざる物をや」

大聖人が遠流されるのを見たり聞いたりしたとしても、今はじめて驚くべきことではないではないか。大聖人のこのお姿は、況滅度後の三類さんるいの強敵ごうてきがあるという釈尊の予言を、そのままの姿で示しているにすぎない、喜ばなさい、とおっしゃっているのです。

諸君もこの段だけは、よく肝きまに銘めいじておくべきです。どんな難があっても、信心だけは破ってはいけないということです。

スピードのある新幹線には、風は強く当たる。飛行機だって、強い風が当たります。風が当たるのがいやだったら、走らなければいい。だが、走らなければ目的地へ着きません。難があるということです、それと同じ道理なのです。

戦いのなかに真の安楽がある

問うて云く如説修行の行者は現世安穩なるべし何が故ぞ三類の強敵盛んならんや、答えて云く釈尊は法華經の御為に今度・九横の大難に値ひ給ふ、過去の不輕菩薩は法華經の故に杖木瓦石を蒙り・竺の道生は蘇山に流され法道三蔵は面に火印をあてられ師子尊者は頭をはねられ天台大師は南三・北七にあだまれ伝教大師は六宗にくまれ給へり、此等の仏菩薩・大聖等は法華經の行者として而も大難にあひ給へり、此れ等の人人を如説修行の人と云わずんばいづくにか如説修行の人を尋ねん、然るに今の世は鬭諍堅固・白法隱没なる上惡国惡王惡臣惡民のみ有りて正法を背きて邪法・邪師を崇重すれば国土に惡鬼乱れ入りて三災・七難盛に起れり

「問うて云く如説修行の行者は現世安穩なるべし何が故ぞ三類の強敵盛んならんや」

「如説修行の行者は現世安穩なるべし」ということは、じつは法華經に説かれているのです。「猶多

怨嫉況滅度後」と、三類の強敵の予言もまた、法華經にある。ひじょうに矛盾むじゆんがあるといえは、矛盾があります。一方では現世安穩と説き、他方では難があると説かれている。

ここは、法華經のなかには現世安穩と説かれている個所があるのに、なぜ、三類の強敵が盛んであるのか、という質問です。たしかに正しい質問です。

これは、一般論で申し上げますが、一つは、先覚者というものは、かならずその時代において大なり小なり難を受けるものです。たとえていうならば、吉田松陰もそうです。また、福沢論吉もそうです。毎日命をねらわれていた。ソクラテスにしても毒をあおって死んでおります。キリストもそうです。孔子もずいぶん迫害を受けています。

いわんや、仏さまです。三世を知るを聖人といいますが、仏さまは、外道の聖人とは本質的に違うのです。外道の聖人は、今世こんぜのことはわかるかもしれない。でも来世のことはなにもわからないのです。それでも難を受けている。仏さまは、三世常恒じょうこう、すなわち永遠の先まで見とおせるのですから、その時代の人々に仏の説く法がわかるはずもなく、したがってより大きな難があるのは当然といえましょう。

しかし、仏法には、あくまでも現世安穩と説かれている。難を受けても、かならず安穩になることもまちがいない。そこが外道の難とは違うのです。また仏法のために受ける難には、宿命転換という原理があるのです。

たとえば私たち個人にとってみれば、信心しきって、罪業を消滅し、自分自身の信心のうえの使

命、すなわち今世の使命を果たしていくなれば、それによってかならず現世安穩になるのです。

さらに日本全体にとつた場合には、折伏をしきって、そして広宣流布を実現していくならば、日本の国の現世安穩も疑いありません。広く開いて、世界も同じ方式になります。

ですから、たとえば日本の広宣流布はすぐには達成されなくとも、それをめざして励みゆくところに、個人の現世安穩、所願満足、すなわち一生成仏はまちがいないのです。われわれの前進には犠牲はありません。

しかし、個人だけ幸せになって、あと日本の国は、それからまた世界は、どうなってもよいというわけにはいかない。日本の、世界の平和を実現するまでは、どうしても戦わなくてはなりません。ある中国の革命指導者のいわく「大闘争のなかに、はじめて平和がある」と。まさに至言^{しげん}です。

広宣流布を達成して日本の国を救おうと、題目をあげて戦いきっていく、その人生もまた大闘争です。苦労もあるでしょう。しかし、そのなかにこそ、自分のほんとうの大満足がある、安穩があるのです。

あれほどの鎌倉時代の権力主義の渦中^{かちゅう}において、日蓮大聖人は、真っ向から四箇の格言をかざして、大闘争をなされ、法体の折伏をされた。けれども、全員が信心したとはいえません。日本全国の広宣流布、いわゆる化儀の折伏を、後世の課題として残されたのです。しかし結局、日蓮大聖人は、最後には身延の沢にお入りになられて、安穩の生活で御入滅になっ*て*いらっ*し*ゃいます。これが証拠です。

「答えて云く釈尊は法華經の御為に今度・九横の大難に値ひ給ふ」

釈尊であっても、九つの大きい難に遭っている。難に遭ったからといって、それでは、現世安穩の仏の境地ではなかったかといえ、そんなことはありません。悠々たる仏の御境界でありました。

どんな人であっても、信心をしていない人は、その生活の実態、心境、境涯をみた場合には、みんな不幸です。砂上の樓閣なのです。

「過去の不輕菩薩は法華經の故に杖木瓦石を蒙り」

不輕菩薩は、二十四文字の法華經を弘めた人です。そしてやはり、法華經のために、杖で打たれたり、石を投げつけられたりしているのです。ここで、法華經というのは「生命の本源を説き明かした教え」と訳してよいと思います。法華經は、いつの時代にも、その時代の民衆救済の最高の哲理になるのです。そのもっとも究極的に完璧なものが、三大秘法の法華經、すなわち御本尊なのです。

たとえば飛行機といえ、空を飛ぶ。人を乗せていくという働きにおいては、飛行機ならば、みな同じです。けれども、ひとくちに飛行機といっても、戦前の飛行機と、今のジェット機とはおのずと異なる。速度も、性能も、收容人数においても、格段の相違があります。

同じように、法華經といっても、釈尊の法華經と、日蓮大聖人の法華經とは目的は同じようであっても、その内容や規模など、ぜんぜんちがいます。南無妙法蓮華經は、これ以上の完璧な法理はないという、最高の法華經なのです。

「竺の道生は蘇山に流され」

道生とは、中国東晉とうしんの時代の人です。その道生は正法を弘通したために、大衆にあだまれて呉の国の蘇山に流された。

ここでは、正法を流布して難に遭あった何人かを、日蓮大聖人が、正法流布の先覚者という意味で取り上げていらっしやるのです。

「法道三蔵は面おもてに火印かなやきをあてられ」

この人は、中国宋代そうだい、徽宗皇帝きそうの時代に、やはり正法を護持していた人です。仏法を護るためにたたかって、顔に火印を押されて、江南の道州に追放になったのです。

「師子尊者は頭こうべをはねられ」

師子尊者は、釈尊滅後千二百年ごろのインドの人です。正法のために、国王の檀弥羅王だんみらに首をはねられた。

「天台大師は南三・北七にあだまれ」

天台大師は、中国に出現された像法時代の仏さまです。「南三・北七」とは中国の南北朝時代、江南に三人、江北に七人、それぞれ異なった学説を唱える者がいたのです。天台は、その南三北七に、たいへんにあだまれました。

「伝教大師は六宗にくまれ給へり」

六宗とは、奈良の六宗、あるいは南都の六宗といい、当時のいちばん中心の指導階層がいた宗派です。これを伝教大師が桓武天皇かんむの前で、法華経によって打ち破った。そして迹門の戒壇を建立したの

は有名な話であります。

「此等の仏菩薩・大聖等は法華經の行者として而も大難にあひ給へり」

これらの人々は、法華經を修行して、しかも大難にあっているではないか。

「此れ等の人人を如説修行の人と云わずんばいづくにか如説修行の人を尋ねん」

この人たちは、在世の、脱益の法華經の、如説修行の人であります。それに対して大聖人は、下種家の法華經の修行者であります。したがって、難を受けていることがかえって、如説修行の人である証明となるのです。

現在でも、あだまれているところは、日蓮正宗創価学会だけです。他の宗教は、天理教でも、立正佼成会でも、昔から存在する既成宗教の集まりである全日本仏教会（全日仏）でも、新興宗教の集まりである新宗連にしてもぜんぶ、権力と結託けつたくしており、なにも迫害などは受けていない。

仏意仏勅を蒙こうむって、権力と戦い、邪法と戦い、迫害を受けているのは、われわれだけではありません。永遠にぜんぶ御書のとおりです。このように勇敢に戦って、仏になれないわけはありません。永遠に幸せになる因をつくっているのです。確信をもって進むのです。

とくに男子は、たくましい人、強い生命の人になっていただきたい。女子は、純粹な信心の人になつていただきたい。

「然るに今の世は鬭諍堅固・白法隱没なる上」

今の世、末法は、争いの絶えない時であるし、釈尊の仏法も隱没してしまふ時です。

また「悪国」——国も悪い。たしかに悪いです。それから「悪王」——政治家も悪い。買収ばかりではないですか。選挙のときは頭を下げて、後はなにをしているかわけがわからない。悪いことばかりやっている。悪王です。「悪臣悪民のみ有りて」——官僚や民衆もよくない。悪臣悪民、結局、民衆のことです。

「正法を背きて邪法・邪師を崇重すれば」

日蓮正宗、大聖人の仏法に背いて、他の思想、哲学、邪教、邪宗等を崇重していくならば。

「国土に悪鬼乱れ入りて三災・七難盛に起れり」

国土の思想が乱れる。「悪鬼乱れ入り」とは、思想が乱れることです。思想が乱れるがゆえに、いっさいが乱れていくのです。それで三災、七難が盛んに起きてくる。あらゆる不幸が、悪循環で連続して起こってくる、との教えであります。

凛々たる折伏弘教の實踐を

かかる時刻に日蓮仏勅を蒙りて此の土に生れけるこそ時の不祥なれ、法王の宣旨背きがたければ經文に任せて権実二教のいくさを起し忍辱の鎧を著て妙教の劍を提げ一部八巻の肝心・妙法五字の旗を指上て未顕真実の弓をはり正直捨權の箭をはげて大白牛車に打乗って權門をかつぱ

と破りかしこへ・おしかけ・ここへ・おしよせ念仏・真言・禪・律等の八宗・十宗の敵人をせむるに或はにげ或はひきしりぞき或は生取られし者は我が弟子となる、或はせめ返し・せめをとしすれども・かたきは多勢なり法王の一人は無勢なり今に至るまで軍いくさやむ事なし、法華折伏・破權門理の金言なれば終に權教權門の輩やからを一人もなく・せめをとして法王の家人けふんとなし

「かかる時刻に日蓮仏勅を蒙りて此の土に生れけるこそ時の不祥なれ」

このような悪世末法の時に、仏の命を受けて日本国に生まれたことこそ、時の不祥である。悪い時に生まれてきたものだ、とおおせです。

「法王の宣旨せんじ背そむきがたければ經文に任せて權実二教のいくさを起し」

この場合の「法王」は釈尊です。釈尊の命令に背くわけにはいけないから、權実二教のいくさ、邪宗破折のいくさを起こした。

大聖人の場合には、釈尊の命令に背くわけにはいけないと述べられて、わかりやすく論理的に釈尊を立てたわけです。一つの仏教史観です。ほんとうは、大聖人は、すべてお悟りあそばしているのです。ですから、大聖人の仏法は、まったく独自のものであるのですが、順序正しく、このようになっているのだと、帰納法的に御明示くださったところであります。

「經文に任せて」——法華經に任せて、「權実二教のいくさを起し」——權教と実教を、はっきり分けておっしゃっています。邪法と正法をはっきり立てわけなければならぬという意味です。

「忍辱の鎧を著て」——「忍辱の鎧」とは慈悲です。どんな難があっても、一切衆生を救いきる三大秘法の仏法をたもたせて、根本的幸せを与えきるといふ、その行動です。

「妙教の剣を提げ」——「妙教」とは南無妙法蓮華經です。

「一部八卷の肝心・妙法五字の旗を指上て」

法華經一部八卷の肝心である南無妙法蓮華經の題目をさしあげてということですが、陰でこそそやっついてはいけないのです。「妙法五字の旗を指上て」です。その決心でいくのです。凜々たる信心の息吹をもって、というのです。

「一部八卷」が、釈尊の脱益の法華經です。「肝心」が、下種家の南無妙法蓮華經、すなわち大聖人の法華經です。種脱相對しているのです。

「妙法五字」とは、南無妙法蓮華經のことです。五字といっても、七字といっても、同じことです。

「未顕真実の弓をはり正直捨權の箭をはげて」

無量義經の「四十余年未顕真実」の弓をはり、法華經方便品の「正直に方便（權教）を捨て」の箭をつがえて、「大白牛車に打乗って」——この「大白牛車」とは、法華經のことです。インドにおいては、いちばん高貴な、強い、立派な車をいうのです。羊車、鹿車、牛車の三車とはくらべようもなくすばらしいのが、大白牛車です。

「權門をかつぱと破りかしこへ・おしかけ・ここへ・おしよせ念仏・真言・禪・律等の八宗・十宗の敵人をせむるに」

權教の門、邪宗教の門を打ち破り、あちらへおしかけ、こちらへおしよせして戦ったと——勇ましいですね、大聖人は。われわれは、こういうわけにはいきませんが、座談会でしっかり折伏しようではありませんか。

「或はにげ或はひきしりぞき或は生取られし者は我が弟子となる」

あるいは逃げ、あるいは退却し、また逃げおくれて生け取られた者は大聖人の弟子となった。

「或はせめ返し・せめをとしすれども・かたきは多勢なり法王の一人は無勢なり今に至るまで軍やむ事なし」

あるいはせめ返し、せめおとしたりするけれども、敵の邪宗の連中は多勢であり、大聖人はただお一人である。だから現在にいたるまで、邪宗破折の戦いはやむことがない。

大聖人は佐渡へ流されても、その広宣流布のための戦^{いくさ}やむことなしだったのです。どんなことがあろうとも、こりはしない、死ぬまで広宣流布のためには指揮をとるぞ、一人であっても、無勢であっても、最後まで、この戦は、法戦は、断固としてするぞ、といわれているのです。

それを、高等部員は忘れてはいけません。生涯の決心にしなければなりません。

大聖人の当時は、大聖人お一人で、無勢です。弟子はみんな退転したのです。しかし今は、老人から赤ん坊までぜんぶ入れれば、約一千万におよぶ同志がいるのです。日本の人口の十分の一いるのですから、むしろ敵は無勢、味方は多勢ではないですか。それでいて退転するなどというのは、よほどおろかな人ですよ。そのような人はどんなところへいっても、人生の敗北者です。

「法華折伏・破權門理の金言なれば」

「折伏」ということばが、はっきり御書にでております。けっして、学会の発明したものでもなければ、学会でかってにやっている実践でもない。大聖人がおっしゃっているのです。御書にあり、法華經にあるのです。

法華經は折伏であり、權教を破していくという金言です。

「終に權教權門の輩やからを一人もなく・せめをとして法王の家人けにんとなし」

この「法王」とは、ここでは大聖人と拝すのです。総じていえば、皆さん方は法王の娘であり、むしろであり、すなわち王子であり、王女です。その氣位でいくのです。

人法共に不老不死

天下万民・諸乘一仏乗と成ひとつて妙法獨ひとり繁昌はんじやうせん時、万民一同に南無妙法蓮華經と唱え奉らば吹く風枝をならさず雨つちぐれ壊くわいを碎くだかず、代よは義農ぎのうの世となりて今生こんじやうには不祥ふしやうの災難を払ひ長生の術を得、人法共に不老不死の理ことわり顯あらわれん時を各各御覽ぜよ現世安穩の証文疑い有る可からざる者なり

これは広宣流布の暁あかつきのすがたです。この段は有名なお言葉です。ここも日寛上人は、さまざまな角度からお説きになっていらっしやいますが、いまは省略します。

大聖人は、今の中国が、昔、もともと平和であったときの故事を引かれて、広宣流布した社会の様相を述べていらっしやるところです。夢に見たよい社会ができるのです。

「天下万民・諸乗一仏乗と成って妙法独ひとり繁昌せん時、万民一同に南無妙法蓮華經と唱え奉らば」

「天下万民」とは、日本国民、また全世界の人々と訳してよいのです。人々が、あらゆる邪宗を捨て、日蓮大聖人の妙法が、独り繁昌する時、すなわち、すべての人々が一同に、三大秘法の御本尊に向かつて南無妙法蓮華經と唱えるならば、ということなのです。

「吹く風枝をならさず雨つちくれ壤をを砕かず」

梢こすえを吹く風は、そよそよと吹き、降る雨も、しとしととして壤つちくれを砕かない。集中豪雨で山崩れや洪水を起こすようなことはなくなるのです。

「代は義農ぎのうの世となりて」

古代、中国に、伏羲ふつぎ、神農しんのうという帝王によって治められた、ひじょうに理想的な、平和な社会があった。泥棒などはいなかったのです。広宣流布になれば、そういう世の中となるのです。

「今生には不祥の災難を払ひ」——「不祥の災難」とは事故です。交通事故も少なくなる。炭坑事故もなくなるのです。「長生の術を得」——長生きできる。

「人法共に不老不死の理ことわり顕れん時を各各御覽ぜよ」

「人法共に」——人生も、そしてまた妙法とともに、ということ。妙法が、この宇宙のいっさいの本源力であり、その妙法にもとづくいっさいの社会、また人生なのです。

「不老不死」——どこまでいっても、幸福を満喫まんきつしきっていける人生を生きていくことができるという事です。

ここは、日寛上人によりますと、深甚しんじんの解釈がありますけれども、わかりやすくいえば、妙法は宇宙の本源力です。永久に崩れることなく、発展せしめていく力です。したがって、妙法は不老不死です。

その法に全人類がのっとるのですから、妙法とともに、最高に満足できる一生を送ることができるのです。所願満足です。

スウェーデン等は、ひじょうに社会保障制度が発達している。社会もよくなった。それでも自殺者が多い。これでは不老不死ではありません。どんなによい社会ができて、妙法がなければ、御本尊がなければ、不老不死の所願満足はないのです。

「現世安穩の証文疑い有る可からざる者なり」

ですから、結局、現世安穩はまちがいない。広宣流布になれば、いま申し上げたような世の中になるのです。

因果俱時ですから、それを、まず個人が実践していくのです。そして自分自身の「吹く風枝をならさず」等の文の証拠をつくっていく。それから自分の住む社会へと広げていくならば、やがては、そ

の国へ、また世界へと、その証拠がつくられていくのです。そのようにしなさいとの御文です。このように、まず個人にとり、それから国家、人類世界にとっていくことが大切です。

これからも、この御書は何回も拝読していくようにしましょう。そうすれば、だんだんとわかっていくようになります。しっかり勉強していただきたい。

如説修行の行者とは

問うて云く如説修行の行者と申さんは何様いかに信ずるを申し候べきや、答えて云く当世・日本国中の諸人・一同に如説修行の人と申し候は諸乗一仏乗かいてと開会かいえしぬれば何れの法も皆法華經いふにして勝劣浅深ある事なし、念仏を申すも真言まごを持つも・禅を修行するも・総じて一切の諸經並びに仏菩薩の御名を持ちて唱るも皆法華經なりと信ずるが如説修行の人とは云われ候なり等云云

「問うて云く如説修行の行者と申さんは何様に信ずるを申し候べきや」

如説修行の行者というのは、どのように信ずる人というのか、との質問です。

「答えて云く」——ここは、世間一般の、如説修行の行者に対する考え方を述べられているのです。

当世（大聖人御在世時代）の日本の人々は「如説修行の人」について、つぎのように考えている。

すなわち絶待妙の立場から、声聞、縁覺の二乗、それに菩薩を加えた三乗のための経も、みな究極においては一仏乗を説いているのだと開会すれば、法華経以前のどの法も、みな法華経となつて、勝劣浅深の差別はない。したがって念仏を唱えても、真言をたもつても、また禪を修行しても、その他のいろいろな宗教を信仰しても、いっさいの諸経、ならびに仏菩薩の名号みょうごうをたもつて唱えるのも、みな法華経をたもつことになるのだと信じていく人が、如説修行の人といわれるのだ、と。

結局、法華経からみればぜんぶ生きてしまうのだから、どの宗教を信心してもぜんぶ如説修行の人になるのではないか、というのです。

これは絶待妙を誤つて用いているのです。ひじょうに巧たみにこじつけの解釈をしています。このような手は、邪宗の輩やからのよくやる論法です。

方便、眞実を立て分けよ

予が云く然らず所詮・仏法を修行せんには人の言を用う可らず只仰ただいで仏の金言をまほるべきなり我等が本師・釈迦如来は初成道しよじやうどうの始より法華を説かんと思食おほしめししかども衆生の機根未熟なりしかば先まず權教たる方便を四十余年が間説きて後に眞実たる法華経を説かせ給たまひしなり、此の経の序分無量義経にして權実権実のはうじ傍示を指て方便眞実を分け給へり、所謂いわゆる以方便力りき・四十余

年・未顕眞実これ是なり、大莊嚴等だいしようこんの八万の大士・施權・開權・廢權等のいはれを心得分わけ給いて領解りようげして言いわく法華經已前の歷劫修行等の諸經は終不得成・無上菩提むじようぼだいと申しきり給ひぬ、然しかして後正宗しやうしやうの法華に至って世尊法久後・要當說眞実と説き給いしを始めとして無二亦無三・除ぞく仏方便說・正直捨方便・乃至不受余經一偈げと禁いましめ給へり

「予が云く然らず所詮・仏法を修行せんには人の言を用う可らず只仰いで仏の金言をまほるべきなり」

前述の一般の人々の考え方を、大聖人が否定されているのです。

「法に依よって人に依らざれ」とのことばもあります。大事なことは「人の言」を用いるのではなく、「仏の金言」どおり実践することです。仏が説いたものをなんでも修行すれば、それは如説修行の人と思われられるかもしれないが、じつはそうではない。諸乗一仏乗の法華經だけを信じて、他の諸經を破折していくのが、ほんとうの如説修行の人なのだと、つぎに經文のうえから証明されるのです。

では、法華經とそれ以前の爾前經とはどちらがうかといえ、たとえば家を建てるときに、足場を築いてから建てはじめますが、その足場にあたるのが爾前經なのです。できあがった家は法華經です。家ができれば、足場はもはや不用です。きれいに取り払わなくてはならない。その取り払うことが折伏なのです。

この例のように具体的なものの場合にはわかりますが、經文の内容などの場合には、なかなかわか

りにくい。そこで一般の人々は、釈尊が説いたことには変わりはないのだから、どの宗派を信じて
も、釈尊の如説修行になるではないかと思ってしまうのです。

ここで、すこし話が飛躍しますけれども、三大秘法の御本尊を根本とした場合には、流通分とし
て、いっさいの經文を生かしてよい。使っていけるのです。さらにキリスト教哲学であろうが、マル
クスの哲学であろうが、インドの哲学であろうが、學問として生かしていくことはいっこうにかま
いません。

「我等が本師・釈迦如来は初成道の始より法華を説かんと思食おぼしめししかども衆生の機根未熟なりしかば先
ず權教たる方便を四十余年が間説きて後に眞実たる法華經を説かせ給いしなり」

釈尊は、三十歳で成道して、五十年間、八十歳まで仏法を説きました。そして衆生の機根が未熟だ
ったので、初めから法華經を説かないで、權教方便の教えを最初の四十二年間説きました。その後
に、釈尊のほんとうの悟りである法華經を説いたのです。

「此の經の序分無量義經にして權實のはうじさしを指て方便眞實を分け給へり」

「此の經」とは法華經であります。法華經の序分が、無量義經という經文になります。法華經の一步
手前に説かれたので、開經といわれます。

その無量義經に、「方便眞實を分け給へり」、すなわち權教と實教との經文をはっきり立て分けた、
と説いてるのではないかということです。

「方便」は權教である四十余年の爾前經、「眞實」は實教である法華經のことです。そのように、無

量義經に明確に説いているのです。

「以方便力・四十余年・未顕眞実」

これは無量義經の經文です。方便力をもって、四十余年、未だ眞実を顕わさず、と読みます。すなわち、四十余年間の教えは、方便教であり、まだ眞実を明かしていない、と無量義經に説いているのです。

「大莊嚴等の八万の大士」——この菩薩たちは無量義經に説かれています。「八万の大士」とは多くの菩薩という意味です。

「施權・開權・廢權等のいはれを心得分け給いて」

法華經を立てるにあたって、釈尊の説法には三重の段階があります。

「施權」——為實施權といいますが、法華經を説く準備として、權教を説くことをいいます。それから「開權」——これは、開權顯實といって權教を開いて、實教を説くことです。そして「廢權」——廢權立實といって、權教を折伏し廢して、法華經を立てていくことです。

大莊嚴等の多くの菩薩たちは、これらの意味を心得て、つぎのように述べたのです。

「領解して言く法華經已前の歷劫修行等の諸經は終不得成・無上菩提と申しきり給ひぬ」

「領解して言く」——仏の説法を聞いて、菩薩たちが、理解したことを述べたのです。

「法華經已前の歷劫修行等の諸經は」——爾前經では、菩薩はたいへん長いあいだ、種々の修行を行って、やっと成仏すると説かれています。

しかし、その歷劫修行を説く爾前經では、「終不得成・無上菩提」——終に無上菩提を成ずることを得ず、すなわち、菩薩たちは修行したけれど、ついに成仏することはできなかった、永久に成仏できない、と断言したのです。

「然して後正宗の法華に至って世尊法久後・要當說眞実と説き給いしを始めとして無二亦無三・除仏方便説・正直捨方便・乃至不受余經一偈と禁め給へり」

「正宗」とは正宗分のこと、本論となる部分をさします。序分、正宗分、流通分とたてわけますが、これも仏法の方軌の一つです。ここでは、その正宗分について述べているのです。いちばん要といふことです。

序分の無量義經が終わって、正宗分の法華經方便品にいたって、初めて「世尊法久後・要當說眞実」と説いた。ここに、法華經こそが、釈尊出世の本懷たる眞実の教えであると宣言したのである。

この「要當に眞実を説くべし」の「眞実」とは法華經です。「世尊は法久しくして後」の「久」が爾前經になるわけです。

また「無二亦無三・除仏方便説・正直捨方便・乃至不受余經一偈」と説きました。

「二無くまた三無し」——唯一仏乘、法華經しかない、ということです。「仏の方便の説をば除く」——ただし、方便の教えは除くのです。

ゆえに「正直に方便を捨て」——方便品の方便でなくして、正直に爾前經の方便を捨てなさい、ということ、以上は、方便品の文です。

「乃至余經の一偈をも受けざれ」——譬喩品の文です。法華經以前の經文は、たとえ一偈といえども絶対に受けてはいけない。このように戒めてあるではないか。そのとおり、如說修行しなくてはいけないのだとおおせです。

今でいえば「不受余經一偈」というのは、御本尊以外は、すべて信仰の対象としてはいけないということですが、「二無くまた三無し」とは、幸福になる道は、ただ御本尊しかない。他にはなにもないということです。

人生の究極の目的は、學者になることでもなければ、教育者になることでもない。また、大政治家になることが人生の目的でもない。それらは、みな方便です。根本の目的は成仏にある。私たちにあってはめていえば、そのように解釈できます。

ただ御本尊のみと信ずる人が如說修行の人

是より已後は唯一仏乗の妙法のみ一切衆生を仏になす大法にて法華經より外の諸經は一分の得益も・あるまじきに末法の今の學者・何れも如来の説教なれば皆得道あるべしと思ひて或は眞言・或は念仏・或は禪宗・三論・法相・俱舍・成実・律等の諸宗・諸經を取取に信ずるなり、是くの如き人をば若人不信・毀謗此經・即斷一切世間仏種・乃至其人命終・入阿鼻獄と定

め給へり、此等のをきての明鏡を本として一分もたがえず唯一乘法と信ずるを如説修行の人とは仏は定めさせ給へり

「是より已後は」——ここは、無量義經や法華經で定められた後は、という意味とも拝せますし、または、末法に入つては、とも立てられます。「唯一乘法」の法華經だけが、一切衆生を仏にすることのできる大法であり、その他の諸經は、少しの利益もあるわけではないのです。

ところが末法の今の学者は、どの經にしても釈尊の説いた教えであるから、みな成仏できるだろうと思つている。そして、權大乘教の禪宗だとか、小乗教の三論、法相、俱舍、成実、律等のいろいろな宗教を、さまざまに信じているのです。

この三論、法相、俱舍、成実は、今は少ないですが、桓武天皇時代以前、伝教大師がでる以前においては、奈良朝文化の中心の宗教だったのです。

「若人^{にやくにん}不信」以下は、譬喩品の文です。

「若し人信ぜずして此の經を毀謗^{きぼう}せば、即ち一切世間の仏種を断ぜん。乃至其^{なにしそ}の人命^{みょうじゆう}終して阿鼻獄に入らん」と読みます。

そのように、釈尊が定めた真実の教えに背き、自分勝手な解釈をして、禪宗などの邪宗を信仰する者は、または今日においては、日蓮正宗、三大秘法の御本尊を誹謗して、かつてに邪法を信心する者は、釈尊が法華經譬喩品において「若し人信ぜずして此の經（三大秘法の御本尊）を毀謗せば、即ち一

切世間の仏種を断ぜん」といわれているように、絶対に幸福にはなれないのです。

「乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」——生きているあいだも幸福になれない。そして死しては、かならず地獄に墮おちる。阿鼻あびきようかん叫喚地獄——地獄には百何十種とありますが、そのなかでいちばんきびしい地獄です。無間地獄です。間断なく、ずーっと苦しみが続くのです。

そのようになると断定されている。こわいことです。ウソというほうが、信じないというほうが、そんなバカなことがあるかというほうが、真実なのです。これを確信してもらいたいのです。

「此等のをきての明鏡を本として一分もたがえず唯一乘法と信ずるを如説修行の人とは仏は定めさせ給へり」

釈尊が説いたこの経文の明鏡を根本として、それに一分も違たがわず、唯一乘法と信ずる、すなわち法華経だけが幸福になる道であると信じていく人を、如説修行の人というのである。このように釈尊が断定しているのです。

これは一往、釈尊の法華経を中心に立てております。その法華経の寿量品の文底に秘沈して、三大秘法の御本尊が説かれているのです。

初めから「三大秘法だ」と、そのまま説いても人々にはわからない。しかも、その三大秘法をわからないで誹謗すれば、かえって地獄へ墮おちてしまいます。ですから、理解できるように一往、釈尊を立て、法華経を表おもてにだされて説かれたのです。

ゆえに、法華経とはなにかといえば、それは日蓮大聖人の仏法、すなわち三大秘法の南無妙法蓮華

經と拝すのです。表面では法華經、法華經といわれているけれども、大聖人の御觀心は、どこまでも南無妙法蓮華經につきるのです。

したがって「唯有一乘法」——一乗の法とは、三大秘法の御本尊のことです。これ以外に幸福になる道はないと「信ずるを」——行ずる、実践する人こそ、如説修行の人といえど、仏は断定されているのです。そしてこの「仏」とは、日蓮大聖人であると拝すのです。

しかし、文の上では、ここは一往、釈尊を表にし、法華經を爾前經に相對して立てておられるところおもてです。

難じて云く左様に方便權教たる諸經諸仏を信ずるを法華經と云はばこそ、只一經ただに限りて經文の如く五種の修行をこらし安樂行品の如く修行せんは如説修行の者とは云われ候まじきか如何いかん

このまえの段では、どのように信ずる者が、如説修行の行者といえるのか、との問いに答えて、大聖人は、釈尊が法華經の方便品で「唯一乗の法のみあり」「正直に方便を捨て」と説き、また譬喩品で「余經の一偈をも受けざれ」と説いた文に従い、權經を捨て、ただ法華經のみを信じてゆく者が、如説修行の人である、とおおせになっています。

ここでは、それに対して、それでは、法華經一經に限って、法師品の五種の修行や、安樂行品の四

安樂行のごとき、授受の修行をする者が、如説修行の者ではないのか、と反論してきているのです。「左様に方便權教たる諸經諸仏を信ずるを法華經と云はばこそ」とは、成仏できない方便權教の諸經諸仏を信ずるのを、法華經を信ずる人であるというのならばともかく、との意であります。

「只一經に限りて經文の如く五種の修行をこらし安樂行品の如く修行せんは」

釈尊の數多くの經のなかから、ただ法華經一經だけを取り出して、「經文の如く五種の修行をこらし」——法師品に説かれたとおりに、受持、讀、誦、解説、書写等の五種の修行を行い、かつ安樂行品のごとく、他の經をまったく誹謗しないというような修行をする者が、「如説修行の者とは云われ候まじきか如何」——如説修行の行者とはいわれないであろうか、といっているのです。

これは、暗に、日蓮大聖人が五種の修行を行わず、また他の宗派を強く破折して、難にあっているのは、如説修行の行者ではないのではないか、という非難をふくんでいるわけです。

仏法修行の要諦は授折二門

答えて云く凡仏法を修行せん者は授折二門を知る可きなり一切の經論此の二を出でざるなり、されば國中の諸學者等仏法をあらあら學すと云へども時刻相應の道をしらず四節・四季・取取に替り、夏は熱く冬はつめたく春は花さき秋は菓なる春種子を下して秋菓を取るべし秋

種子を下して春菓を取らんに豈取らる可けんや

ここは、法華經の修行にも、時によって、授受と折伏の二門があることを述べられて、その時を違えては、成仏どころか仏法を乱してしまうとおおせられているところです。

そして、末法は折伏の時であり、法華經、すなわち三大秘法の御本尊を持って、他のあらゆる邪宗教を破折していくことが、如説修行になることを示されています。安樂行品に説かれたような授受の修行は、正法時代、像法時代の修行である。末法の修行ではない、とこのまえの論難を打ち破っているのです。

「答えて云く凡仏法を修行せん者は授折二門を知る可きなり一切の經論此の二を出でざるなり」

仏法を修行するにあたっては、授折二門を知るべきである。授受と折伏です。この二つのうちのどちらかです。授受とは、やわらかく、他の經を批判したりしないで、法を説くやり方です。法華經の安樂行品に説かれた修行です。正法時代、像法時代、天台大師の時代などは、授受です。

授受の場合には、御本尊がないのです。御本尊を根本とした場合には、折伏になっていくのです。今でいえばこう考えてよいでしょう。

ですから、釈尊の仏法の場合、天台仏法の場合、また伝教大師の仏法の場合には、御本尊がありませんから、やはり授受です。いま末法においては御本尊がありますから、御本尊を根本として修行させていこう、救っていこうということになります。

釈尊在世、正法、像法年間は授受、末法の日蓮大聖人の時代は折伏です。御本尊を中心にして、他のいっさいの爾前權教を破折していくのが、時に適^{かな}った修行なのです。折伏をするのだから、三類の強敵が競い起こってくるのは当然でしょう。

「されば国中の諸学者等仏法をあらあら学すと云へども時刻相応の道をしらず」

「国中の諸学者」——国中の仏法を学んでいるもの、すなわち邪宗の僧などは「仏法をあらあら学すと云へども」——仏法をほぼ学んで知っているようではあるけれども、「時刻相応の道をしらず」——正法、像法、末法という時がある。その時に応じた修行を知らない。みな授受と折伏の二道を知らないというのです。

あくまでも成仏していくには、その「時」をわきまえなくてはいけない。その時に適った仏法がある。末法においては、末法万年^{じんみらいさい}尽未来際、これから永遠に、この三大秘法の御本尊によって、御本尊を種にして成仏する以外にない。絶対の幸福をつかむ以外にないのです。

現在、日本にはたくさんの宗教がある。宗教法人だけでも十八万あるという。世界中では、たいへんなものです。しかし、時に適った正しい宗教は、また仏法の真髄というものは、太陽が一つしかないように、一国に国王は一人しかいないように、一つしかないのです。それが日蓮正宗であり、御本尊なのです。

「四節・四季・取取に替^{かわ}れり」

「時刻相応」ということ、時ということとは、すべてのものについても大切です。一年のなかでは、春

夏秋冬という時の変化に応じて、自然界も、いっさいのものが変わってきます。

「夏は熱く冬はつめたく」——夏は暑く、冬は寒い。

「春は花さき秋は菓^みなる」——春には美しい花がいっぱい咲き、秋はその実がなる。

「春種子を下して秋菓を取るべし秋種子を下して春菓を取らんに豈^{あた}取らる可けんや」——作物を穫^とるにしても、春に種をまいて、秋、その実をとります。秋に種をまいて、春にその実を収穫しようと思つても、それは無理です。そのように、すべてのものには時が大切であつて、時をまちがえたらなんにもならないとおおせです。

末法は法華折伏の時

極寒の時は厚^{きぬ}き衣は用^{もち}なり極熱の夏はなにかせん、涼風^{りやうふう}は夏の用なり冬はなにかせん、仏法も亦復^{またまた}是^かの如し小乗の流布して得益^{とくやく}あるべき時もあり、權大乘の流布して得益あるべき時もあり、実教の流布して仏果を得べき時もあり、然るに正像二千年は小乗權大乘の流布の時なり、末法の始めの五百年には純円・一実の法華經のみ広宣流布の時なり、此の時は闍^{とら}諍^{じやう}堅固・白法^{びやくほう}隱没^{おんもつ}の時と定めて權実雜^{ぞうらん}亂^{みだり}の砌^{みざり}なり、敵有る時は刀杖弓箭^{とうじやうきゆうせん}を持^{たも}つ可し敵無き時は弓箭兵杖何にかせん、今の時は權教即実教の敵と成るなり、一乘流布の時は權教有つて敵と成りて・まぎら

はしくば実教より之を責む可し、是をしやうしやく摂折二門の中には法華經の折伏と申すなり

われわれが折伏行を實踐していくということは、いまこの御文にあるとおり、大聖人のおおせどおりの修行であり、実践です。それは明瞭であります。「摂折二門の中には法華經の折伏と申すなり」——折伏をしなさいと、こうおおせなのです。

「極寒の時は厚き衣は用なり極熱の夏はなにかせん」

ひじょうに寒いときには、厚くて暖かい衣は役に立つ。けれども、暑い夏には、なんの役にも立たない。かえってじゃまになります。

「涼風は夏用の冬はなにかせん」

すずしい風も、また同じです。夏には喜ばれる。けれども冬は、風があったらますます寒い。

「仏法も亦またまた復是くの如し」

仏法もまた、同じように、時に応じた経、そして修行があるのです。

「小乗の流布して得益あるべき時もあり」

小乗教が広まって、功德のある時もありました。

たとえばいうならば、明治時代にも、蓄音機があった。それは、木の箱に大きなラッパのついた形をしていて、手でハンドルをグルグル回して、やっと音が聞こえるような蓄音機だった。それでもレコードを聞く役には立ちました。「聞こえた」といって喜んでいた。利益があったわけです。

同じように、釈尊在世や、滅後すこしのあいだは、小乗教でも、得益があった。ぜんぜんなんの宗教も信ぜず、人生観をもっていない人にとっては、幸せだったといえましょう。

「權大乘の流布して得益あるべき時もあり」

權大乘が広まって功德のある時もあった。正法時代の後半や像法時代などはそうです。

「実教の流布して仏果を得べき時もあり」

実教である法華経が広まって、成仏できる時もある。

「然るに正像二千年は小乗權大乘の流布の時なり」

いろいろな時があるけれども、正法時代、像法時代の二千年のあいだは、小乗教、權大乘教が広まっていく時である。正法時代のまえのほうが小乗教、それ以後、正法時代の後半と像法時代は、權大乘の流布の時です。

「末法の始めの五百年には純円・一実の法華経のみ広宣流布の時なり」

「末法の始めの五百年」というのは、正法千年、像法千年、そのつぎの五百年ということです。仏法では五百年ずつくぎっているのです。

正法年間とは、釈尊滅後五百年とつぎの五百年の、最初の千年間をいい、さらにその後の五百年とつぎの五百年が、像法年間になります。ですからここでは、末法の始め、万年尽未来際の始めを五百年といわれたわけです。この末法の始めの五百年のちょうど中間、すなわち釈尊滅後二千百七十一年目に、日蓮大聖人は御出現になったのです。

そしてこのときに、「純円・一実の法華經」、これは三大秘法の御本尊、末法の法華經と拝すべきですが、そのみが広宣流布する時である、というのです。

絶対に広宣流布する。高い所にある水が、低い所へ流れると同じ道理なのです。

「此の時は闍諍堅固・白法隱没の時と定めて権実雜亂の砌なり」
とうじようけんこ びやくほうおんもつ みぎり

この三大秘法の御本尊が流布する末法の時を、釈尊が予言して「闍諍堅固・白法隱没の時」といったのです。教義上の争いが絶えず、釈尊の仏法の功德がなくなる時代になるとの意味です。そして「権実雜亂の砌」——権教と実教が入り乱れて、区別がハッキリしなくなってしまう時です。

今は、いうなれば宗教の戦国時代です。これを統一するのが、私どもの役目です。その方法は折伏行しかないのです。

「闍諍堅固」とは、広くいえば、争いやもめごとが絶えないということです。日本もしかり、また国際社会もしかりです。また日本の宗教界は、既成宗教も新興宗教も、たえずケンカをしては分裂している。

御本尊のもとに、わが日蓮正宗創価学会だけは、ガッチリ団結していこう。諸君がその中核になって、永久に広宣流布の基礎をつくっていくのですから、団結しあっていてください。

「敵有る時は刀杖弓箭を持つ可し敵無き時は弓箭兵杖何にかせん」
きやうせんへいじよう

たとえば、敵があってはじめて、刀や杖や弓矢を持つかいがある。それらを持って、敢然と戦っていかなくてはならない。敵がなければ、武器は用をなさないのである。

「今の時は權教即実教の敵と成るなり」

いま末法の時に入ると、權教は、即実教の、正法の敵となっている。

「一乗流布の時は權教有って敵と成りて・まぎらはしくは実教より之を責む可し」

「一乗流布の時は」——大聖人の仏法、三大秘法の御本尊が流布されるにあたっては、「權教」——

邪宗邪義があつて、敵となつて、広宣流布を妨げようという時には、御本尊を根本として折伏をしていきなさい、との御命令です。

「是を摂折二門の中には法華經の折伏と申すなり」

この戦いが、摂受と折伏に分けると、法華經の折伏といわれるのです。

天台云く「法華折伏・破權門理」とまことに故あるかな、然るに摂受たる四安樂の修行を今の時行ずるならば冬種子を下して春菓を求る者にあらずや、雞にわとりの曉あかつきに鳴くは用ゆうなり宵よいに鳴くは物怪もつげなり、權實雜亂の時法華經の御敵を責めずして山林に閉じ籠こもり摂受を修行せんは豈あに法華經修行の時を失う物怪にあらずや、されば末法・今の時・法華經の折伏の修行をば誰か經文の如く行じ給へしぞ、誰人にても坐おわせ諸經は無得道・墮地獄の根源・法華經独ひとり成仏の法なりと音こえも惜まずよばはり給いて諸宗の人法共に折伏して御覽ぜよ三類ごうてきぎたの強敵来らん事疑い無し

「天台云く『法華折伏・破權門理』とまことに故あるかな」

天台大師は「法華經は折伏の教えで、權門の理を打ち破っていく教えである」といつているが、まことにそのとおりであるとおおせです。

「然るに授受たる四安樂の修行を今の時行ずるならば冬種子を下して春菓を求る者にあらずや」

そのように、末法は折伏の時代であるのに、安樂行品に説かれた「四安樂」などという授受の修行を行ずるならば、それは、時を違えたことになる。折伏もせず、そのようなことをしているならば、それはちょうど冬に種を蒔いて、春收穫を得ようとしているようなもので、なんの收穫も得られないとおおせです。

総じては、いまの邪宗教の僧侶は、この姿です。現在の宗教界は、これにピッタリあてはまっている。本来、衆生を救うべきであるのに救わない、安閑あんかんとしている。ということは、法自体がまちがっている証拠です、末法という時代に相応しないから、なんの役にも立たないのです。

「雞にわとりの曉に鳴くは用もちなり宵よに鳴くは物怪ものけなり」

鶏が、朝鳴けば、それは目をさまさせてくれ、役に立つ。夜、鳴いても役に立たない。それと同じように、末法に折伏をせず、授受の修行を行うのは、道理にはずれたことになってしまふのです。

「權実雜亂の時」——末法の、正法と邪法とが入り乱れている時ということですよ。

「法華經の御敵を責めずして」——御本尊の敵である邪宗教の輩やからを折伏もしないで、「山林に閉じ籠り授受を修行せんは」——世間を離れて、山や林に閉じこもり、自分一人で四安樂等の授受を修行し

ているような人は、「豈あに法華經修行の時を失う物怪にあらずや」——法華經流布の時をまったくわきまえないバケモノであるとおおせです。

「されば末法・今の時・法華經の折伏の修行をば誰か經文の如く行じ給へしぞ」

そのように末法の修行は折伏なのです。その末法に、「法華經の折伏の修行をば」——御本尊を中心とした折伏の修行を、「誰か經文の如く行じ給へしぞ」——だれが、經文のごとくに行じているかといえ、日蓮大聖人を除いて、だれもいないではないか。

「經文の如く」とは、総じては法華經全体になりますけれども、そのなかでもとくに、勸持品ならびに不輕品と拝せるわけです。勸持品ならびに不輕品の經文のごとく行ずる人はだれがどうか、日蓮大聖人お一人しかいないではないか、と示されているのです。

「誰人にも坐あわせ」——だれであってもよい、「諸經は無得道・墮お地獄の根源・法華經獨ひとり成仏の法なりと音こゑも惜まずよばはり給いて」——だれでもよいから、爾前經では成仏できない、そればかりか人を地獄へ墮おとす根源である、ただ法華經だけが成仏のための法であると、声も惜しまず叫んで、「諸宗の人法共に折伏して御覽ぜよ」——邪宗教の人々を、またかれらの邪義を、かたはしから折伏してみなさい。どういうことになるか。「三類の強敵来らん事疑い無し」——かならず、三類の強敵が競い起こることはまちがいないとおおせです。

大聖人は佐渡の国へ流された。しかし、この勸持品、不輕品どおりに折伏をなさったゆえに、佐渡の国へ流されたのだから、なにも疑うことはないのだよ、とおおせなのです。

法華經の行者に三類の強敵

我等が本師・釈迦如来は在世八年の間折伏し給ひ天台大師は三十余年・伝教大師は二十余年・今日蓮は二十余年の間権理を破す其の間の大難数を知らず、仏の九横くおうの難に及ぶか及ばざるは知らず、恐らくは天台・伝教も法華經の故に日蓮が如く大難に値あい給いし事なし、彼は只惡あつ口・怨嫉おんしつばか計りなり、是は兩度の御勘氣・遠国おんごくに流罪せられ竜口たつのくちの頸くびの座・頭の疵きず等其の外惡ほか口せられ弟子等を流罪せられ籠ろうに入れられ檀那の所領を取られ御内を出いだされし、是等の大難には竜樹・天台・伝教も争いかでか及び給うべき、されば如説修行の法華經の行者には三類の強敵打ち定んで有る可しと知り給へ

「我等が本師・釈迦如来は在世八年の間折伏し」

「在世八年の間折伏し」とは、釈尊の場合、最後の八年間に説いた法華經が、折伏にあたるといふことです。法華經は随自意です。だれが聞かなくても、どんどん説いていきました。そして爾前經はぜんぶ方便であつたと説き、眞実の法門を明かしました。そのことをいっているわけです。

「天台大師は三十余年」

天台大師は十八歳で出家し、二十三歳で法華經を究めて、その後、爾前權教の諸宗を破折して、五十七歳で摩訶止觀を説きましたが、そのことをさしているのです。天台は三十余年のあいだ、權教を破折したという意味です。

「伝教大師は二十余年」

伝教大師もまた二十余年間、桓武天皇のまえで南都六宗を打ち破るなどの折伏をしてきたことをさしています。

「今日蓮は二十余年の間權理を破す」

日蓮大聖人は、建長五年に立宗を宣言なさってから、佐渡でこの「如說修行抄」を著されるまで、ちようど二十年たっているのです。その間、大聖人は、四箇の格言等をもって、いっさいの「權理」、すなわち邪宗教を折伏してきたのです。經文のとおりのお振る舞いです。

「其の間の大難数を知らず」

その間に受けた大難は数えきれない。おもなものだけでも、小松原の法難、松葉ヶ谷の法難、伊豆の流罪、そして竜口の頸の座と佐渡流罪等々、たいへんなものです。

「仏の九横の難に及ぶか及ばざるは知らず」

「仏の九横の難」とは、釈尊が受けた九つの大難です。大聖人の難が釈尊の受けた難と同じくらいであったかどうか、それは「知らず」といわれています。釈尊との比較は、謙遜して、ここではふせていらっしやるのです。しかし事實は、比べものにならないのです。大聖人の受けた難のほうがどれほ

ど大きいか、天地雲泥の差です。

「恐らくは天台・伝教も法華經の故に日蓮が如く大難に値い給いし事なし」

おそらくは、天台大師も、伝教大師も、法華經を弘通するにあたって、権理を破るにあたって、大聖人ほどの大難にあったことはないであろう。

「彼は只惡口・怨嫉計りなり」

天台大師や伝教大師は、ただ惡口されたり、陰で怨嫉されたりしただけである。

「是は兩度の御勘氣・遠国に流罪せられ」

日蓮大聖人は、伊豆へ佐渡へと二度流罪された。

「竜口の頸の座・頭の疵等其の外惡口せられ弟子等を流罪せられ籠に入れられ檀那の所領を取られ御内を出だされし」

竜口で首を斬られようとなされた。小松原の法難のときには、眉間に傷を受けました。それらの大難のほかにも、ずいぶんと惡口されたりしている。大聖人の弟子も島流しにされた。また弟子を牢に入れた。そして、大聖人の信者も、領地を没収されたり、所を追われたりした。

「是等の大難には竜樹・天台・伝教も争か及び給うべき」

この、大聖人とその一門が受けた大難に比べれば、竜樹や天台や伝教の受けた難などは、ものの数ではない。

「されば如説修行の法華經の行者には三類の強敵打ち定んで有る可しと知り給へ」

このように、大聖人も種々の大難を受けられている。したがって、末法において仏の経文どおり、折伏をしていく人には、かならず三類の強敵が競い起こってくる、それを覚悟しなさい、とのおおせです。

日蓮大聖人とは、もちろん立場は違いますが、これは私たち信徒にも通ずることです。個人においても、一生成仏するためには、多少の難はあるのです。また、広宣流布を遂行していくためには、日蓮正宗創価学会においても同じです。難があるがゆえに経文どおりになるのです。それを臆病になったり、これだけ信心しているのに、と疑いをもつような信心では成仏はできません。大偉業をなしとげることできません。

世間のことににおいても、戦争中など、平和運動家とか反戦主義者といわれる人たちが、どれほど多く牢へ入っていることか。やはり難を受けています。

偉大なことをなすためには、それぞれ苦難があるのです。いわんや、われわれは、広宣流布という最高の理想社会の建設をめざしています。また個人個人においても一生成仏という永遠の福運を積むためです。それくらいの難はあたりまえだと覚悟しなさい、という指導です。

ですから諸君は、いま仏道修行中ですから、ただ広宣流布を願ひ、題目をあげ、しっかりと勉強していくのです。なにも知らない人は、お題目をあげていると笑ったり、あんなにまで勉強しなければならぬのかなどというかもしれないけれども、十年先、二十年先、三十年先になったならば、その差はたいへんなものになります。これだけを胸に入れて進んでいってもらいたい。信心だけは忘れて

はいけません。

大聖人こそ如説修行の行者

されば釈尊御入滅の後二千余年が間に如説修行の行者は釈尊・天台・伝教の三人は・さてをき候ぬ、末法に入つては日蓮並びに弟子檀那等是なり、我等を如説修行の者といはずば釈尊・天台・伝教等の三人も如説修行の人なるべからず、提婆・瞿伽利・善星・弘法・慈覚・智証・善導・法然・良観房等は即ち法華經の行者と云はれ、釈尊・天台・伝教・日蓮並びに弟子・檀那は念仏・真言・禪・律等の行者なるべし、法華經は方便權教と云はれ念仏等の諸經は還かえつて法華經となるべきか、東は西となり西は東となるとも大地は持たもつ所の草木共に飛たび上りて天となり天の日月・星宿は共に落ち下りて地となるためしはありとも・いかでか此の理ことわりあるべき

「されば釈尊御入滅の後二千余年が間に」

釈尊が入滅されてから、日蓮大聖人が御出現になるまでの、二千余年のあいだ、すなわち、正法時代、像法時代、そして末法の初めに、ということですよ。

「如説修行の行者は」

法華經に説かれたごとく実践し、大難を受けているものは、ということです。このまえの段にあらうように、三類の強敵にあって戦っているものが、如説修行の行者になるのです。

「釈尊・天台・伝教の三人は・さてをき候ぬ」

釈尊自身と、像法の仏といわれる天台・伝教の三人は、いちおう、おいておく。

「末法に入っては日蓮並びに弟子檀那等是なり」

末法に入っては、如説修行の行者は、日蓮大聖人、およびその弟子檀那以外にはいないではないか、とのおおせです。

「我等を如説修行の行者といはずば釈尊・天台・伝教等の三人も如説修行の人なるべからず」

絶対の御確信です。大聖人門下を如説修行の行者といわなければ、釈尊、天台、伝教等の三人も、如説修行の人ではなくなってしまう。だれも、大聖人以上に、法華經のために、三大秘法の御本尊のために、難を受けている人はいないのです。ですから、大聖人を法華經の行者といわないならば、釈尊も、天台、伝教も、絶対に、如説修行の行者とはいえなくなってしまうのです。そんなバカなことはないわけです。

「提婆・瞿伽利・善星・弘法・慈覚・智証・善導・法然・良観房等は即ち法華經の行者と云はれ」

「提婆」——釈尊の従弟で、釈尊にさんざん敵対し、迫害した提婆達多です。「瞿伽利」——これは、

一度出家して仏弟子となったが、退転して、こんどは提婆達多を師匠としたため、生きながら地獄に墮ちた。「善星」——釈尊の出家前の子供です。やはり一度出家しましたが、低い悟りに執着して、

後、外道に近づき、仏法を否定した人です。それから「弘法」——日本の真言の開祖です。空海ともいいいます。また「慈覚・智証」——いずれも天台宗の座主でありながら、真言の邪義を取り入れてしまった人です。「善導」——中国の念仏宗の第三祖です。これは、最後には、柳の枝で首をつり、七日七夜も苦しんで死んだといわれます。「法然」——日本の念仏宗の開祖です。「良観房」——極楽寺に住んでいた律宗の僧です。

もし、大聖人およびその門下を如説修行の行者といわないならば、これらの、大謗法をおかしたのもや邪宗の開祖たちが、法華經の行者となってしまうではないか。そんなことはありません。

しかし、もしありうるならば、「釈尊・天台・伝教・日蓮並びに弟子・檀那は念仏・真言・禪・律等の行者なるべし」——釈尊、天台、伝教、日蓮大聖人および弟子檀那が、念仏、真言、禪、律等の行者ということになってしまふではないか。

またそうであれば、「法華經は方便權教と云はれ」——法華經は、方便權教、かりの教えといわれ、「念仏等の諸經は還って法華經となるべきか」——念仏等の爾前權教が、かえって法華經となってしまうというのか。

「東は西となり西は東となるとも」——東と西とが逆になるようなことがあっても、「大地は持つ所の草木共に飛び上りて天となり天の日月・星宿は共に落ち下りて地となるためしはありとも」——大地は、草木とともに飛び上がって、天となり、天の日や月や星が、みな落ちてきて大地となるといふような、まったく考えられないようなことが、たとえあったとしても、「いかでか此の理あるべき」

——どうして、大聖人が法華經の行者でないなどということがありえようか。どうして提婆達多等が法華經の行者となり、爾前經が法華經になるなどということがありえようか。あるはずがない、とおおせです。

絶対の御確信です。大聖人の仏法は、まちがいありません。成仏得道の法理です。御本尊はまちがいないのです。絶対に幸福になります。

われわれが幸福にならなかったならば、信心しない人が、幸福になるといふのか。信心をなにもしないで、われわれを誹謗した人が幸せになり、成仏して、われわれが不幸になって地獄へ墮ちるか、そんなバカなことはありません。われわれを誹謗し、そしてまた批判する人々は、謗法であるがゆえに不幸になる。御本尊を持った者、広宣流布に進んだ者は、かならず成仏し幸せになれる。その断言の書です。

難を恐れて一生成仏はない

哀なるかな今・日本国の万民・日蓮並びに弟子檀那等が三類の強敵に責められ大苦に値うを見て悦んで笑ふとも昨日は人の上・今日は身の上なれば日蓮並びに弟子・檀那共に霜露の命の日影を待つ計りぞかし、只今仏果に叶いて寂光の本土に居住して自受法樂せん時、汝等が阿鼻大

城の底に沈みて大苦に値わん時我等何計無慚と思はんずらん、汝等何計うらやましく思はんずらん、一期を過ぐる事程も無ければいかに強敵重なるとも・ゆめゆめ退する心なかれ恐るる心なかれ

「今・日本国の万民・日蓮並びに弟子檀那等が三類の強敵に責められ大苦に値うを見て悦んで笑ふとも」

ここは、大聖人御在世当時の、世間の人々の姿を述べられていますが、広宣流布途上の日蓮正宗創価学会を笑い、誹謗する人々の姿に通じます。

日蓮大聖人が島流しにされ、弟子檀那も鎌倉幕府の権力による迫害にあっているのをみて、世間の人々はさんざんに嘲笑した。また現在でも、われわれが題目をあげ、広宣流布のために寸暇を惜しんで活動しているのをみて、なにもあれほどまでしなくても、などと笑っていることに通じます。

「昨日は人の上・今日は身の上なれば」

そのように、きのうまでは大聖人の弟子檀那を嘲笑し、苦しい姿をみて喜んでいた。人のうえとみていた。しかし、きょうはわが身のうえのことにならずなるのです。

「日蓮並びに弟子・檀那共に霜露の命の日影を待つ計りぞかし」

したがって、霜や露が朝日の光にたちまちにとけて蒸発してしまうように、日蓮大聖人ならびに弟子檀那のこの苦しみは、ほんのわずかの辛抱であるとおおせです。

生命は永遠です。大聖人の仏法は、永遠の福運を築く仏法です。そのために、すこしぐらいの難はある。しかし難があっても、すこしのあいだのがまんです。批判され、いじめられるならば、罪障消滅して、かならずあとは大福運を積めるのです。難のあることをむしろ喜んでいきなさい、とのおおせなのです。

御本尊を持つ人は仏身をたもつ。御本尊を持つ人は仏と同じなのです。ですから、われわれを批判した人は、仏をいじめたことになり、こんどは自分が罰をうけなければならない。これが生命の厳しい因果律です。

「只今仏果に叶いて寂光の本土に居住して自受法樂せん時」

ここは信心しきった姿、難を乗りきった生命の姿、強信の姿を述べているところです。

「只今仏果に叶いて」——大聖人のお心になつて、すなわち大聖人のおおせどおりに実践して、「寂光の本土に居住して」——これは御本尊と境智冥合することです。「自受法樂せん時」——生きることにそれ自体が、楽しくて楽しくてたまらないという境涯、絶対的幸福境涯を獲得したとき、すなわち仏の境涯、生命を獲得したときという意味です。かならず、そのようになっていけるのです。

そのときに、こんどは反対に「汝等が阿鼻大城の底に沈みて大苦に値わん時」——「汝等」とは、大聖人を誹謗してきた連中です。その人々が、誹謗してきた罰で無間地獄に墮ちて、たいへんな苦しみを受けていくのです。

「我等何計無慚いかばかりむざんと思はんずらん、汝等何計うらやましく思はんずらん」

われわれは、その姿をみて、どれほどか哀れに思うであろうか、そして誹謗してきた連中は、どれほどわれわれの福運に満ち、幸福を満喫しきった姿をうらやましく思うことであろうか、とのおおせです。

創価学会が再建されて約二十年、わずかその二十年の歴史をみても、この原理にあてはまっていた人がたくさんおります。これからの前途洋々たる人生においても、この御金言を強く強く確信して進んでいただきたいと思っております。

「一期を過ぐる事程も無ければいかに強敵重なるとも、ゆめゆめ退する心なかれ」

「一期を過ぐる事程も無ければ」——一生は短い。だから、その一生のあいだに、「いかに強敵重なるとも・ゆめゆめ退する心なかれ」——すこしばかりの三類の強敵がおそいかかってきたからといっても、それは、わずかのあいだのがまん、あとは生涯、永遠の幸福境涯を会得できるので、縁に紛動さんどうされて退転してはいけないと戒められているのです。

どうしても罪障消滅のためには、難や批判を受けて、それによって人間革命していくしかない。ですからすこしばかり苦しくとも、齒をくいしばって、御本尊をだきしめて前進するのです。

「恐るる心なかれ」——難を恐れてはいけない。それでは一生成仏はできない。

この段は、いちばん大事なところです。ここを一生涯忘れないで、骨髓に刻みつけて、人生を生きていただきたいのです。

日蓮大聖人の時代には、有名な熱原の法難がありました。そのとき、大聖人、日興上人、また神四

郎兄弟等の法華經の護持者を迫害したのが、かの有名な平左衛門尉頼綱です。だが、その平左衛門も大聖人が御入滅になって十四年もたないうちに、一族ぜんぶが謀反ひはんの罪で、斬きられたり、流されたりにしてしまったのです。それほどはっきりしているのです。

これは現在にも通ずる仏法の嚴然たる法理です。

このように大なり小なり信心に反対して、諸君をいじめたらいへんです。もしそのような人がいたならば、その人の姿を一生みていてごらん下さい。この御文のとおりになります。もしもこのとおりにならないとしたならば、それは、諸君のほうが退転してしまっているからです。電気だって電流が流れていなければ、手をふれてもしびれません。また電燈もつきません。したがって、こちらに信心があれば、現証ははっきりします。現証がでないのは、信心がないからなのです。

ともあれ、一生を通じてみなくてはわからない。誹謗した人の罪がどんなものであるか、どんな現証があらわれるか、最後はみえるのです。

命のかぎり題目を唱えよ

縦たとひ頸くびをば鋸のこぎりにて引き切り・剛どうをば後ひしほ鐘こを以て・つつき・足にはほだしを打うってきり鐘を以てもむとも、命のかよはんほどは南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と唱えて唱へ死しに死しるな

らば釈迦・多宝・十方の諸仏・靈山会上にして御契約なれば須臾の程に飛び来りて手を取り肩に引懸けて靈山へ・はしり給はば二聖・二天・十羅刹女は受持の者を擁護し諸天・善神は天蓋を指し幡を上げて我等を守護して慥かに寂光の宝刹へ送り給うべきなり、あらうれしや・あらうれしや。

厳しい御文です。「縦ひ頸をば鋸にて引き切り」——首を鋸で引き切られても、「足を以て・つつき」——胴をひしほこでつきさされても、「足にはほだしを打ってきりを以てもむとも」——足には足かせをかけて、きりでもんだとしても、ということですよ。

「命のかよはんほどは南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と唱えて唱へ死に死するならば」

どのような苦しい目にあっても、どのような大難にあっても、命のあるかぎりには、南無妙法蓮華經と題目を唱えぬいていきなさい、とのおおせです。

「釈迦・多宝・十方の諸仏・靈山会上にして御契約なれば須臾の程に飛び来りて手を取り肩に引懸けて靈山へ・はしり給はば」

そのようにして死ぬならば、釈迦、多宝、それから十方の諸仏は、法華經の靈山の会座で法華經の行者を守ることを誓っていますから、たちまちのうちに飛んできて、手を取り、肩に負って、靈山へ走って連れていってくれるというのです。

「二聖・二天・十羅刹女は受持の者を擁護し」

「二聖」とは、藥王菩薩と勇施菩薩です。「二天」とは、持国天王と毘沙門天王です。それから十羅刹女等、これらの諸仏、諸天が「受持の者」、すなわち御本尊のために大難と戦いぬいたものを、擁護しだきかかえてくれる。

「諸天・善神は天蓋を指し幡を上げて我等を守護して慥かに寂光の宝刹へ送り給うべきなり」
諸天善神も、天蓋を指し幡をあげて、われわれを守護して、たしかに常寂光の仏国土へ送りとどけてくれるとおおせです。

ここところは、簡単にいえば、そのように信心を貫き通したのだから、成仏、永遠の幸福はまちがいないということです。因果俱時です。受持即觀心で、御本尊を守りきり、信心を貫き通したのですから、永久に仏の境界で、色心ともに絶対の幸福境涯に生ききっていけると、こういう意味なのです。

文永十年 癸酉 五月 日

蓮 在御判

人々御中へ

此の書御身を離さず常に御覽有る可く候

「此の書御身を離さず常に御覽有る可く候」

この「如説修行抄」を身口意しんぐいの三業さんごうで読みきっていきなさい、とのおおせです。すなわち御本尊に向かつて題目を唱え、折伏をしきって、広宣流布に邁進まいしんしゆくことが、この「如説修行抄」を読んだことになるのです。

(昭和四十一年六月と七月 高等部講義)